

りんご

新保 弥代枝 北海道

香りよきりんごをあまた贈りくれし友の病よサクサクと去れ
〈王林〉と〈ふじ〉堂々と並びたる箱の四隅に〈アルプス乙女〉
姫りんご〈アルプス乙女〉はルビーレッドりんご飴作ると孫が欲しが
る
〈ふじ〉×〈姫りんご〉にて生れしとふ〈アルプス乙女〉津軽の育ち
禁断の木の実をりんごとせしわけは マールム「りんご」マールム「罰」ゆゑ

アトリエ

吉田 史子 岩手

たうとつに悲しみは来て赤信号待つ間なみだの盛り上がりくる
若き日の夫の自画像アトリエにかければ時間の巻きもどりゆく
アトリエの壁にかけたる自画像の夫と目が合ふ おやすみあなた
鋏・錐・鉛筆の芯 アトリエに尖れるものは寂しさとふ
君思ふところに濃淡ありしこと寂しき日々を重ねて生きる

ワイン醸造場

金子 智佐代 茨城

醗酵室、貯蔵庫、事務室残りたり日本初ワイン醸造場ここ
原野なる女化原をなばけがはらに幾万のぶだう咲かせし神谷伝兵衛
色深き煉瓦造りの地下室の旧醗酵室の樽のひそけさ

3・11の煉瓦の罅の痕見ゆる旧貯蔵庫のレストラン混む

電気プラン買ひて振り向くかはたれの間に浮き立つ〈CHATEAU D. KAMIYA〉を

夫退職す

伊 沢

玲 千葉

うつせみの四十二年八か月勤めたる夫けふ退職す
転職を一度単身赴任二度入院二度経て今の夫あり
烏羽玉の黒き革ぐつ履きつづけ夫は語らず長き険路を
われよりも長き時間を夫に添ひそのこゑ聞きし夫のネクタイ
明日から自由なる夫しばらくは何もしないで風に吹かれよ

チエスターコート

平 野

清 一 神奈川

警察の防災無線が老人の徘徊つげる晩秋の闇
秋ふかし白頭翁^{びくどり}たちがむれてゐるちびつこ広場に午後の陽しろし
旨塩の味にひかれてけふも買ふ惣菜店「イトウ」の葱玉子焼
朝に着て昼はかかへて夜も着るチエスターコート暦は大雪
手暗がりつくらぬやうに文を書く南の窓に冬至の陽さす

両国橋

岩 崎

佑 太 東京

ひとつぶづつぶだう食ひつつそのぶだうくれたる人の噂話す
晩秋の第一校舎暮れやすく鳥語で話しはじめる五限
広重の斜線の雨のふりしきる両国橋をわたるむかうへ
傷つけることを怖れてより深く傷つけるなり人をおのれを
いにしへの大君のごとく座りをり冬のゆふひに照らされながら

鉄板の上

三浦陽子 長野

強風を伏見稲荷の古茶屋の窓に聞きつつ人しづかなり
ポケットにマウスを入れて日の当たる窓辺へ移るパソコンとわれ
夕暮れが夜になるのをぼんやりと見てゐるわれが玻璃窓に浮く
空腹にまかせて食べる焼きそばのソースとつぶり辛くて甘い
食べきれぬお好み焼きが乾きゆく程よい温度の鉄板の上

靴音

今井由美子 岐阜

川霧の流るる朝をしろじろと砂洲ふちどりてしらすぎの佇つ
無造作に流るるやうな小気味よさへ時空へ越え来し古文書の文字
本棚にかひな伸ばせば夕かげの及ぶ窓辺をつつむしづけさ
靴音の妙にしづみて響きたり人まばらなる夜の図書館
静けさに溶けゆくやうな靴音をたらへて冷ゆるふたひらの耳

雨の領域

野村まさ子*愛知

目はスマホ見つめたままでだんまりの子に体温計そつと渡しぬ
しんどさのものさし数多あるだろう きみにはきみのわれにはわれの
教師にも心はありてじわじわと壁にしみこむ雨の領域
なだらかな椅子のカーブをなぞるとき椅子は動かず手を這わせたり
しゅっしゅっつと身を削られて鰹節きれいに消える準備をしてる

十二月

田中

泉 大阪

アドヴェントカレンダーの窓あけてゆく子にたつぷりとある十二月
とりあへずここに置く、とふわたくしの癖のうつりし子のゐる冬日
「さむがりやのサンタ」「サンタのなつやすみ」二冊は椅子に重なりてあり
争ひは巡りつづける地球儀の埃をぬぐふ師走の朝も
ふかくまで寒さの届きはじめたりバター切らして過ごせる日々に

冬の扉

飯田

進* 兵庫

安いけどまざくはなくサンドイッチ買いに行くパン屋「サリアン」
安いけど悪くはないぞ台湾製、自転車工具愛用している
自転車で足をつかずに静止する練習している訳は言わない
古民家と古民家風は似ているが違いについて上手くいえない
蝶番に椿油を注してから静かに閉じる冬の扉は

昭和ひとけた

鮎川

清 山口

面会日車椅子より手を伸ばす妻に手折りぬ赤ままの花
妻居らば見ることのなき納戸より前世紀なるカニ缶の出づ
開けたれば匂ひも味もカニ缶で二日をかけて食べおほせたり
登山杖を老人杖に持ち替へて街ゆく吾に鳳ほうおろし
墓じまひ賀状じまひの流行れども旧習墨守の昭和ひとけた